松浦武四郎がみた飛鳥の風景
－『己卯記行』を読む－

長谷川　透

第１章　はじめに

明治 12（1879）年、松浦武四郎は吉野への旅路なかで飛鳥を歩いた。飛鳥で宿をとることもなく、一気に通り過ぎた。この旅は、松浦武四郎 62 歳と妻とう 52 歳による夫婦旅で、77 日間と長きにわたる。その行程は、東京、静岡、愛知、岐阜、三重、京都、大坂、兵庫、和歌山、奈良であり、この道のりを 77 日間で踏破した。現代人からみればこの行程と所要日数の旅は尋常ではない。江戸時代の旅人が現代人よりも健脚であることは想像に難くないが、殊更、松浦武四郎の健脚ぶりは彼の半生をみれば頷けられる。

退職後の武四郎は、趣味に生きた。彼の趣味は、旅行と古物蒐集であり、明治 12 年の旅はまさに趣味を十二分に満喫したものだった。武四郎の古物蒐集は幼少期からもので、退職後は趣味が高じて好古家として名を馳せた。武四郎が蒐集した古物資料は多岐にわたる。その多くは日本の資料であるが、アメリカやフランス、エジプト、中国など海外の資料も含まれ、時代も新石器時代から近代まで幅広い。かつて、これら武四郎コレクションの行方については周知されていなかったが、松浦武四郎研究の吉田武三によって東京世田谷の静嘉堂文庫に収められていることが判明し、近年は國學院大學の内川隆志氏らによってコレクションの整理が進められた。静嘉堂にある武四郎コレクションは総数 874 点にのぼり、その大半が考古資料である。彼が著した二冊の『撥雲余興』には、これら考古資料の精緻な図と詳細な解説が加えられており、好古家松浦武四郎として再評価されはじめている。さらに、武四郎は自らの足で歩き、自らの目を通して記録するという行為を若い時分に身につけ、それはまさに考古学の実践であった。旅先で見聞した遺物や蒐集した古物の検証に多くの古典を引用し、民俗例を掲げて考察する姿勢は、趣味の域を越えた博物学者といってよい。

松浦武四郎は明治 12 年の旅について『己卯記行』を著した。関西一円を巡るこの旅行のなかで、武四郎は廃仏毀釈によって廃れてしまった寺院の状況を嘆きつつ、私費を投じてでも寺院の再建したいと県令に働きかけをしている。また、この旅では蒐集仲間である堺県令の税所篤の世話になる事も多く、聖徳太子墓の調査に伴って石室内に入るという機会にも恵まれた。武四郎はその時の石室内の様子を『己卯記行』に詳しく記し、その記述内容は終末期古墳研究において大変興味深い内容となっている。『己卯記行』は明治 10 年代における関西一円の古器旧物の実状が詳細に記されているのである。

本稿は、『己卯記行』を読み解くことによって明治 10 年代の飛鳥の風景（名所、陵墓、石造物、古器旧物を含む）を辿るものである。また、好古家武四郎が蒐集した多くの古物の中には飛鳥地域出土の遺物も数点確認されており、その遺物の意義づけをおこなうものである。さらに、『己卯記行』における聖徳太子墓内の観察記は、飛鳥の終末期古墳を研究するうえで示唆に富んでおり、本稿で紹介するともに若干の検討を加えた。

第２章　松浦武四郎について

文化 15（1818）年、松浦武四郎は伊勢国一志郡須川村（現：三重県松阪市小野江町）に生まれた。地士（郷士）の家柄に生まれた武四郎は、近くの真覚寺で読み書きを習い、全国の名所をまとめた『名所図会』を愛読して育った。松浦家の前には伊勢街道が通り、武四郎が 13 歳の時に「文政のおかげ参り」が起こり、伊勢神宮に続く街道を行き交う旅人から大いに刺激を受けた。16 歳から全国各地を巡る旅に明け暮れ、25 歳の時、長崎で蝦夷地がロシアの南下政策により脅かされているという衝撃的な事実を知り、蝦夷地に赴く決意をした。28 歳で初めて蝦夷地に渡った武四郎は、その後、蝦夷地を６回も踏破し、幕末における北方探検家として幕府にもその名が知れ渡った。こうした若い時分の歩みが、江戸時代の神足歩行術を体得させ、一日 60㎞も歩いたという伝説を生んだ。蝦夷地でアイヌ文化や地名を丹念に記録し、世間にアイヌ民族とその文化について知ってもらうために出版活動もおこなった。青・壮年期に武四郎が得た経験と交友関係は、後の武四郎に大きな影響を与えることになる。

明治２（1869）年、北海道開拓使判官在職時には、江戸時代以来の名称「蝦夷地」に代わる新しい名称として、武四郎は「北加伊道」を提案し、政府に採用された。彼が「北海道」の名付け親と呼ばれる所以である。明治３（1870）年、武四郎は 53 歳で北海道開拓使判官の職を辞した。これ以降、武四郎は古物蒐集や旅などの趣味に生きた晩年を過ごした。が、年老いてなおその健脚ぶりは衰えなかった。鉄の足を持つ武四郎は、沖縄以外の日本各地を旅し、約２万㎞を歩いたといわれる。70 歳には大台ケ原や富士山にも登るなど旅の巨人であった。旅を通して各地の文化に触れ、古物収集家をはじめ新政府時代の同僚や旧友に会うなど多くの人々と交流を深め、それを記録に残した。旅先で見た様々な文化を絵入りで記録し、それを本として刊行する。武四郎は生涯で 100 冊以上も本を出版した。武四郎は旅行家、探検家、出版家、作家、収集家、好古家など様々な顔を持つ偉人であった。

第３章　『己卯記行』を読む

『己卯記行』とは

稿本『己卯記行』は、現在松浦武四郎記念館に所蔵されている。武四郎自筆のもので三冊からなる。第一冊は外題「己卯記行　天」、内題「己卯記行一の巻／尚古杜多とも云へる也」。第二冊は外題「己卯記行　地」、内題「己卯記行二の巻／一名尚古杜多」。第三冊は外題「己卯記行　人」、内題「己卯記行巻の三／一名尚古杜多とも云」。当時、この三冊と同じ内容の本は刊行されなかったが、武四郎がこの旅行中におこなった古物会の出展物を一覧にした『尚古杜多』のみが二分冊にして刊行された。このため自筆本である『己卯記行』は近年まで公に出ることはなかったが、福永昭氏、唐津巳喜夫氏、佐藤貞夫氏らによってこの三冊が解読され、平成 27 年に松浦武四郎記念館（以下、記念館）によって刊行された。今回は、記念館刊行の『己卯記行』を講読し、飛鳥地域に関する記事を中心に検討をおこなった。

旅の目的と奈良の道程

明治己卯の 12 年の旅は、3 月 15 日に出発、5 月 30 日に帰宅という 77 日間の長旅であった。この旅は、武四郎 62 歳、妻とう 52 歳の夫婦旅であるが、この旅を夫婦で成し遂げられたのには大きな動機があった。この旅の動機として大きいのは、我が子一志の七回忌にあたって高野

第１図　『己卯記行』飛鳥周辺行程図（太線：推定行路）

山に日牌を納めることにあった。武四郎夫婦の亡き子を想っての旅路といえる。しかし、この旅にはほかに目的があった。旅の道中での大阪天満宮への大神鏡奉納、大峯修験の基地である吉野への探訪、各地の古物愛好家との交流を図ることなど、武四郎の目的はひとつだけではなかった（佐藤 2015）。

『己卯記行』は、『一の巻』では 3 月 15 日に東京の自宅を出発し、静岡→愛知→三重→滋賀→京都→奈良→ 4 月 15 日吉野着まで、『二の巻』では 4 月 16 日に吉野を満喫して 4 月 17 日の五條に到るまで、『三の巻』では 4 月 18 日に橋本を出て大坂→兵庫→大坂→京都→滋賀→岐阜→愛知→静岡→神奈川→ 5 月 30 日の自宅に帰着までの行程が日誌体で記される。飛鳥は『一の巻』に記され、聖徳太子墓の見学は『三の巻』に記されている。

奈良から飛鳥、そして吉野へ

4 月 11 日、木津川を渡り、奈良坂を過ぎ、般若寺、転害門、興福寺、東大寺南大門、博覧会、東大寺境内、春日大社を巡った。ここで東大寺南大門の破損状況をみて、修復の必要性を感じている。南大門の窮状をこの旅の中で県令税所篤に訴えたことにより、翌明治 13 年に東大寺南大門が修繕される。4 月 12 日は、新薬師寺、白毫寺、鹿野園、藤堂家旧陣屋跡、博覧会を巡った。博覧会とは東大寺境内でおこなわれていた奈良博覧会であり、好古家武四郎の目を肥やしたに違いない。4 月 13 日、念仏寺、興福院、瑞景寺、不退寺、元明陵、元正陵、海竜王寺、法華寺、秋篠寺、西大寺、菅原天神、菅原寺、垂仁陵、唐招提寺、薬師寺、郡山城、岡本寺、法輪寺、舟塚古墳、法隆寺、龍田神社、達磨寺、当麻寺を巡る。途中、武四郎は中条良蔵や伴林光平、北浦定政などの山陵家との思い出を語りだし、人脈の広さを披露している。4 月 14 日、松浦武四郎は、当麻寺の門前を発ち、現在の大和高田市、橿原市、明日香村、桜井市を通過し、桜井市慈恩寺追分で宿をとる。妻を同伴しての旅であるが、この日の歩行距離はおよそ 44km を測る。14 日の行程は下記に詳述するが、飛鳥では山陵、石造物、寺院を一気に見てまわっている。4 月 15 日、追分に戻り、多武峰、四軒茶屋、竜在村、東千股村、西千股村、上市駅、宮滝を巡り、念願の吉野に到る。この日は多武峰から山伝いに四軒茶屋に立ち寄り、竜在峠を越え吉野に入った。以下、飛鳥に関する記事を引用し、解説する。

『己卯記行　一の巻　尚古杜多とも云る也』

> 十四日。昨夕同宿の道者等吉野より来りしと云に、昨今下の方花盛り、上は今両三日も過て満開なりと云に大に安心したり。扨宿の主人の話しに此地に昔し役行者の宅地ありとて、また案内を出し呉たるに依て染堂、染井、早かけ桜等回り、車をもとめて、〈五十丁〉高田、〈十八丁〉曽我、〈一里〉今井に走らせ、是より右のほう畝傍山の方に到るに、爰は昔とかわり田圃を埋て茶店、旅篭屋等立つらなり。並松美々敷ぞなりたる。

4 月 14 日は、当麻寺門前の丸玉屋を発ち、役行者の宅地を案内された後、桜を見て回り、車（人力か）で高田、曽我、今井まで走らせた。今井から少し南下して右手に畝傍山を見、昔の風景と変わってしまったことを嘆きながら、整備された神武天皇陵や綏靖天皇陵を囲う松並が美しいと述べている。

> 〈十八丁〉久米寺。開帳なる故に上りて霊宝物等を拝す。目にとまる物一つとてなし。只久

米仙人の像の大なるに驚たり。当国の霊場にては、何処も昔しは彫工巧なりしが、仏、菩薩何れのも古雅精工なりしが、別ても仙人の像の威風只ならぬには驚たり。過て妙法寺村よりして畑の端道七八丁上る。道も何もなかりしに、其畑作る人に聞ば、何れもねんごろにしめし呉る。間もなく山の頂に大なる屋根様のもの見しが、是則益田が池の碑台成。爰にして上見るに目ざましもの也。

久米寺の霊宝物には目にとまる物がないといいつつ、久米仙人の像の大きさと佇まいに驚く。その後、妙法寺村から畑道を上り、山の頂にある大きい屋根形をした益田池の碑台を見つけるが、いまの益田の岩船のことである。

是より見瀬村と云え畑道を下ること凡十町、此処少しの町有。五丁斗にて下平田村に到る。此村の上に欽明帝の陵有。其傍松の上の株立たる処に山王石といへるもの有。是は元禄十五年十月五日、同所字鑊子山の下池の中より掘出せりと。面貌、次に図するか如き猿面也。依て山王石と云一躯二面また三面の物も有。其回り柵を結たれども、よく見やれば其あらましを筆し来たる。

ここ見瀬村から畑道を下って下平田村に到り、欽明天皇陵を見る。その傍の松の上の株のところにある山王石とは、現在の吉備姫王墓にある猿石のことである。そこで猿石の由来を述べ、猿石の廻りは柵で囲っていると記している。

是より畑道を少々上りて鬼の雪隠とて有。是古代の石棺なる事明らかなり。鬼のまな板、是は石棺の蓋にても有るかと思はる。倭彦命の窟、亀石等過て右の方文武陵、是を高松山の石墓といへりし也。近頃御修補の時小塔多く出たり。余も一つを得て蔵する也。是より少々下りて橘寺、〈五丁〉岡寺、〈二十丁〉阿倍文珠、〈十二丁〉飛鳥宮、左りの方に畝傍、耳なし、天のかぐ山等を見て、是より田圃道を行。右に行て桜井駅に出る。凡一里斗過て三輪の町、人家凡五六百軒、明神に参詣して山のこしまゝ追分に出る。

そこから畑道を少し上って鬼の雪隠や鬼の俎板を見るが、古代の石棺とその蓋であろうと推測している。そこから、倭彦命の岩屋（野口王墓古墳）、亀石を見て、右手側に文武陵を見る。その文武陵を高松山の石墓と記し、最近行われた修陵の時に小塔が多く出土したものを武四郎は１つ入手したことを述べている。そこから立部の集落内を少し下って橘寺に行き、岡寺、阿倍文珠院、飛鳥坐神社を見て回る。道程の順序でみれば、阿倍文殊院の前に飛鳥坐神社を見ていると思われ、記述が前後している。そこから、左手側に畝傍山、耳成山、天香具山などを見て、桜井駅に着き、さらに三輪の町を過ぎて、三輪明神（大神神社）に参詣し、そのまま山越えして追分に到着する。

是より本道は道者引も切らず。実に街道すじの繁栄云ばかりなし。また左右の田圃には菜の花、麦、蓮華草の紅、黄、緑の三色今さかりなり。山には桜、昨今が満開なるとぞ。初瀬に到るに大鳥居も倒れしまゝにて、昔しにかわりし様、市中は時節柄なればにぎやか。吉野やと云に宿を取て長谷寺え参詣するに、諸堂のさま依然たれども学侶の来る事少きが

也。市中えの金落はよろしからずと聞り。花は昨日盛りなりとぞ。是より三日、多武峰は咲きまじと聞ぬ。

伊勢本街道の賑わいを感じ、田圃に咲く花の色、山に咲く満開の桜など大和路の春を楽しんでいる。初瀬に着くと鳥居付近の景色が昔と変わってしまったが、市中の賑いを述べている。長谷寺に参詣し、境内の様子や街道筋の経済状況を述べている。

十五日。〈五十丁〉追分に戻り、うをやと云に休ふ。是真誠講、一新講の宿なりけるが、此頃の泊りの様子を聞に、昨夜も二百五六十人有しと。最早今晩は二百人斗の前案内が来り、明日は二百三四十人も有と。爰大和路中にては、是と初瀬の桔梗やに第一番の泊りすとぞ聞ける。是より人足を頼て多武の峰に到る。七十五丁、近道を行ば五十丁なりと。坂道さがし。町家を過、御橋を過るや女人結界の標石有て、厳重に関門の有しが、左右の坊にて二布にむつき恥じし様なく、多くは何か彼や等暖廉、あんどんにしるして、軒傍に粧へる妻妾たち。御休みなされ、御中食は、御酒も御座ります等、茅渟、鯛、若山比目魚、法師魴等を餉さげ、別ても大鳥居の正面花中やと云るは、是当山の長老なりしが、中々に大仕懸けの旅篭やとぞなれたり。堂塔も大に剥落し神山の杉、桧も余程緑を失ひたるやと思はる。爰にて聞に今明日の花は満開なりと。

追分に戻って、うをやで一泊。４月 15 日、そこから近道の坂道を通って多武峰に向かうが、参道は歓楽街となり、大鳥居の正面にある花中屋も妙楽寺の元長老が営む旅篭屋になってしまったと嘆く。そして境内の堂塔も大いに寂れ、神山の杉や桧も緑が失われたと嘆いている。

〈二十丁〉四軒茶やに到るに雨降出たり。依て東京を出しに旅下駄とて低きを着て来りしが、是よりは道あしければ妻も我も草履をもとめて是を着たり。扨坂を下るに〈二十丁〉竜在村。人家十三軒。こゝかしこに有。また峻坂を下りて、〈二十丁〉滝の畑〈人家十五軒〉。爰に旅篭や有。然れども今日弁当を持来らざりしが故に、旅籠や等にて昼飯を乞ふる。是より炊よし申に、いかに春日なりとても、是には困りしが故に、菓子、饂飩等を喰てひた下りに下る。此処に滝有。此村より左に一つ山を越れば竜門の庄に到ると聞ば、その竜門の滝も見たく思ひけれども、雨やみなければ直に下る。妻はことの外難儀のよしなれども、忍びて岩坂を下り行に、こなた彼方に滝有。実に滝畑との村名も尤、峨々たる岩壁、数千仞の巨岩の谷々に簇々たるは竜在の名もおかしとぞ思はる。一里斗過て東千股村に出る。

冬野にある四軒茶屋に着くと雨が降り出し、妻と共に草履に履き替え、そこから坂を下って竜在村に着き、また急な坂を下って、滝畑に着く。そこの旅篭で菓子と饂飩を食べてからさらに坂を下り、東千股村に着く。

聖徳太子墓の見学

『己卯記行　巻の三　一名尚古杜多とも云』には、武四郎が聖徳太子墓をに入るまでの経緯が詳細に記されている。４月 20 日に大鳥神社の宮司富岡百錬（鉄斎）の家に到着する。翌 21 日午前中に大鳥神社の宝物を見て、午後に富岡百錬と共に堺県令の税所篤を訪ねたところ、県令

から聖徳太子墓への立入調査に同伴を勧められる。聖徳太子墓の見学は県令を訪ねることで得られた偶然であった。明治 12 年の聖徳太子墓の立入調査の時、横穴入口をコンクリートで塞いでしまったため、現在は中に入る事ができないとされる。この時、共に入った宮内省の大澤清臣の実見記録と富岡鉄斎の三骨一廟見取り図は聖徳太子墓の石室を考えるうえで貴重な資料となっている。この時の立入調査は画期的で重要な学術調査であり、それに偶然にも同伴して入室できた武四郎の強運と人脈は敬服に値する。以下、聖徳太子墓の立入に関する記事を引用し、解説する。

『己卯記行　巻の三　一名尚古杜多とも云』

（四月）二十日。雨やまざれども出立す。（中略）。従是在道に入、田圃通り〈深井村と云を過一里にして〉家原の文殊に到る。爰より大鳥の社見ゆ。（中略）。一時過に大鳥社内富岡百錬の宅に着す。三時頃より快晴。

二十一日。滞留。大鳥神社の宝物を乞て拝す。只珍しきは大鳥神社五所流記帳と云もの有。凡七八百年前の書帳也。（中略）。尤此神社、元は三重の塔等有て、天台宗の院家地なりしが、御一新後堂塔総て破却になり、近頃神道に改まり、官幣大社となりて後、富岡百錬奉仕の後ますく盛大になりし也。（中略）。午後より百錬同道。市村なる税所県令を訪ふ。令は頗る古物好きにして、此宅と申もの一路居士の寓居の跡なりしと。（中略）。然るに明日は、河内国磯長一廟一骨の陵を、内務省諸陵局の大沢と云人展見として開かるゝよし聞に、我等にも行とすすめるに預り、約て帰る。夜一時頃に及。途上菜花の香紛々たり。此道すじを信徳街道と云るよし。

4 月 20 日、深井村を過ぎて家原寺に着き、さらに大鳥大社に向かい社内にある富岡百錬の家に着く。21 日午前は大鳥神社の宝物類を見るが、廃仏毀釈を経て富岡百錬が宮司となった大鳥神社の復活を喜んでいる。午後から百錬と武四郎は、現在の堺区神石市之町にある県令の税所篤邸を訪ねた。税所も古物好きで、税所宅は一路庵禅海が住職をしていた禅海寺に大通庵を移した寓居に住んでいた。明日は磯長一骨一廟の陵（聖徳太子磯長墓）を内務省諸陵局（宮内省諸陵掛か）の大澤清臣が点検しに来るから我等も一緒に見に行こうと勧められ、行くと約束する。三人で古物の会話が弾んだのか帰りは夜中になるほどであった。

二十二日。早天より百錬同道、市村に到るに令には早馬にて出張に成しよし。依て我等直に出張被成し黒土村に行。是より丹南、誉田八幡へ行、古市え到る。川橋有〈三厘をとる〉。越ておむろの大黒。過て在道通り、上の太子に到る。人家五十戸斗。一条の在郷町なり。町中に地蔵堂有。是より石階数十級を上りて

磯長山叡福寺聖宝院。真言古議。一名石川寺また伝法輪寺、磯長寺、御廟等の称有。地形、東は二丈岳に添て古市川を臨めり。西に敏達天皇陵、東に孝徳天皇陵、前に用明天皇、南西に推古天皇陵。是を梅鉢の五陵と云。我等二王門に到るや、県令我等が遅延を待て大に欠伸したりと。光拝堂に到る。我是を恭礼拝す。皆笑てやまざりけれども、我是を恭礼せずんば心よからず。

22 日早朝より富岡百錬と同伴で税所宅に行くが、税所は早馬で先に出立していて、二人は直

に向かう。磯長山叡福寺の別称や地形、周辺の御陵の立地を述べ、仁王門に着く。税所は二人の到着を欠伸するほど待ちわびていた。拝殿で恭しく礼拝するものの、それをみた周りの人たちは笑っていたが、武四郎は礼拝しないと気が済まない性分であった。

最早戸長、区長、東京出張の諸陵懸りの小吏～等開扉の石扉を明て陵窟を過て、三骨配置の処に到り見る。是三骨と云は、中は皇太子御母穴穂部部間人皇后、向て右皇太子、左り太子の妃膳臣の女、何れも其石棺と云るもの崩れて重ね有。其棺台何れも大岩石にして、中高くして、右是に次ぎ左りまたこれにつゞく。廟中に蝙蝠無数、秋風の木葉を飄が如く、窟中一面夜明星（コウモリノフン）にして何もなし。大蝋燭五六挺を点して入りしが、西壁に何か文字有。何ともよめがたし。是恐らくは皇太子彫刻なし給ふ、大慈大悲本誓願の百四十文字なるや否。石棺と云は石にあらず。石灰作りの物也。たゝき土といへる類なり。是皆ばらくに成たるを棺台の上に積重ねたり。何か有やと一同に探せども、少々木片が少々有しのみ。是恐らくは崩づれの棺と思はるに、我銅の鋲釘一寸二三分の物を拾たり。其余梵字を書たる石と楷書を認めし小石多し。然し梵字の方は十中一二に不過。是古色もまた大に有。恐らくは高野大師の書かと思はる。其楷書の方は、享保年間或信者の寄付せいものか。梵字の有方に書ける楷書、是凡筆ならず。必ず大師たるを疑を容るなし。実に今日何たる好因縁有て此陵窟に入る事を得たるぞ。然れども其尊骨の聊も残らず、遺品の無は、

園大暦　貞和四年二月三日伝聞吉野悉没落全分無㆑人失㆑念物歟少々相残　懸火之処件余焔移蔵王堂悉成灰燼云々冥慮尤可怖事也　太子御廟又師泰懸㆓兵火㆒追㆓捕太子御体㆒破損歟廟中沙金以下　有之悉捜取言語道断事云々同月十三日裏書抑武蔵守師直　自㆓吉野㆒皈参今日入㆑夜京着云々吉野蔵王権現為師直為灰燼太子御廟為師泰被㆓打破焼払㆒追捕不㆑知㆓其数㆒云々国家安危為㆑之

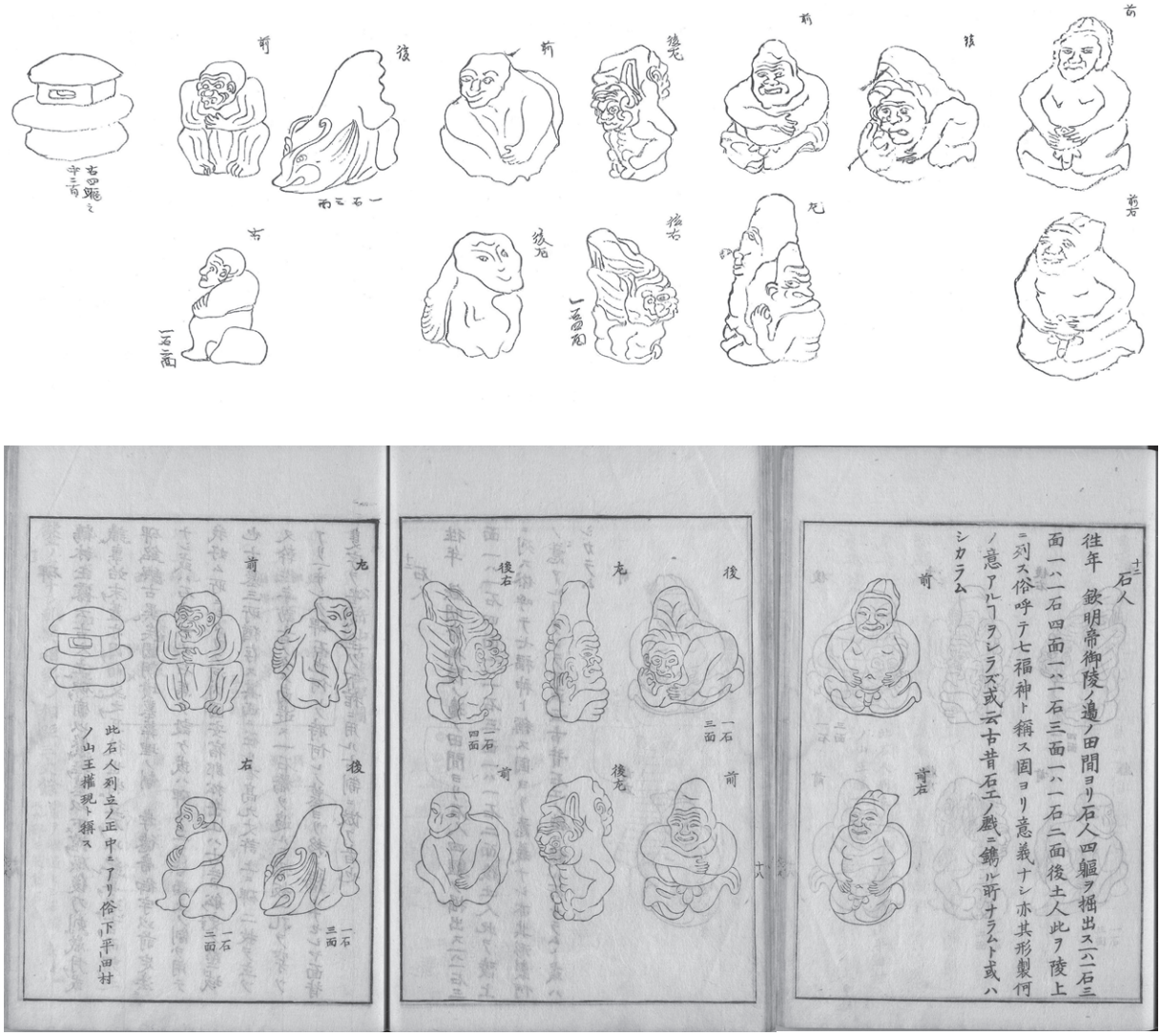
如何事なるべきに依てか。実に夜明沙斗（コウモリフン）也。陵の上には大なる樟一株是は大香木と云。其余松、杉、竹橘の類一本生ることなし。是も不思議。是を三不思議と云。其一つは樟の外何も生ぜず大雨の節も不崩、諸鳥此林に棲ずと。是利外の利と云り。棺者のしからしむる処也。石を如㆑元封じ畢て、大師寄付の結界石を拓す。

早くも、戸長、区長、諸陵掛の大沢清臣は扉を開けて羨道を通り、三骨一廟となった玄室に到る。三骨の何れの石棺も崩れて積み重なっている。棺台は大岩石であるが、中央の穴穂部間人皇女が最も高く、これに続けて右の聖徳太子、続けて左の妃膳大娘の高さとなっている。玄室内は蝙蝠がたくさんいて、一面蝙蝠の糞だらけ。大蝋燭を５・６挺点してみると、西壁に聖徳太子が彫刻したと思われる 140 文字の大慈大悲本誓願がある。石棺は、石造ではなく、石灰作りのもので、たたき土の類である。みなバラバラになって棺台に積み重なっている。ほかに何かないかと一同で探してみると、木片が少々あるのみ。これはおそらく崩れた棺であるが、武四郎は 3.6 ～ 3.9㎝ほどの銅の鋲釘を見つけた。また、周りには梵字を書いた石と楷書と思しき小石が多数あるが、梵字は十あるのうちの一つ二つに過ぎない。なかには古めかしいものも多く、空海の書であろう。楷書のほうは、享保年間かあるいは信者の寄付であろう。梵字の方に書かれた楷書はただの凡筆ではない。必ず空海の書であるのは疑いようがない。今日は何の良い因縁により陵窟に入れたのだろうか。ただ、ご尊骨は全く残っておらず、遺品がないのはどういうことだろうか。実に蝙蝠の糞ばかりだ。陵の上には大きな樟が一株あり、これは大香木であ

るという。そのほか松、杉、竹、橘の類は一本も生えない。是を三不思議という。その一つは樟以外はなにも生えず、大雨でも崩れない、この林には鳥が棲まないなど。この利は外の利という。棺に眠る者がそうさせるのだ。石の扉を元の通り封じ終えて、空海寄付の結界石を採拓した。

飛鳥の石造物と御陵に関する記事

松浦武四郎が、現在の明日香村内でみた風景のなかで一番関心を引いたのは、図に掲げている山王石であろう。明治 12 年当時、山王石は現吉備姫王墓に所在しており（今尾 2015）、武四郎は柵越しに山王石をみたことになる。己卯記行に描かれた山王石は武四郎自身が描いたものだが、武四郎オリジナルのスケッチではない。何故かと言えば、己卯記行の山王石図と全く同じ構図で描かれた書物があるからである。その書物は藤貞幹著の『好古日録』（寛政 9（1797）年）である。両書を比較してみると、顔と躰の表現にわずかな違いがあるものの、山王石と石人の



第２図『己卯記行』と『好古日録』の猿石（縮尺不同）
上図：『己卯記行』より山王石　下図：『好古日録』より石人

構図は全く同じである。『己卯記行』の山王石は『好古日録』の石人を参考にそれを描いたとしか思えない。旅の道中か、それとも旅を終えて『己卯記行』として執筆しているときに『好古日録』の挿図を書き写したものかと考えられる。だが、『好古日録』では「欽明帝御陵の邊の田間ヨリ石人」と表記されるが、『己卯記行』では「山王石といへるもの（中略）鑵子山の下池の中から掘出せり」とあり、猿石の名称のほか発見の由来などの記述が異なっている。19 世紀半ばには「猿石」という呼び名が定着していた（今尾 2015）にもかかわらず、武四郎が鑵子山の池中の山王石と書いたのは、『好古日録』以外の文献にも目を通しながら、地元の人との会話で得られた情報を盛り込んだのかもしれない。好古家武四郎にとって藤貞幹の『好古日録』はバイブルであった。好古家の山中笑（1850 ～ 1928）が著した『共古日録』第 6 巻には、武四郎が語ったこととして「考古家必読書ハ桂林漫録、尚古図録〈二迄〉、梅園奇賞、好古日録、好古小録、千歳のためし、涛閣帖等をみらるべし」と記されている。武四郎は多くの書物を読み漁り、好古家の道を究めていったのだろう。

また、武四郎は、鬼の雪隠と俎板、窟屋、亀石を見て、その後も橘寺にも立ち寄っている。おそらく橘寺の二面石もみているだろう。だが、それには触れていない。武四郎は大和名所図会にも描かれた曰く付きの飛鳥の石造物を隈なく見て回っているが、好古家にとって山王石はそのなかでも特筆すべき対象であったことがわかる。

好古家松浦武四郎が見た聖徳太子墓

旅行中に立ち寄った県令の税所篤の誘いによって武四郎と富岡鉄斎は運良く聖徳太子墓の石室内に入ることができた。この時、富岡が石室内に入って描いた三骨一廟の図が、梅原末治の論文「聖徳太子磯長の御廟」にある「富岡鉄斎翁拝写御廟石室図」（梅原 1940）である。この梅原論文には、富岡による実見談と大澤による聖徳太子墓磯長実検記全文が掲載され、近代以降の聖徳太子墓研究で欠くことのできない重要な論文である。とくに、この時富岡が記した石室図は、終末期古墳の研究において学術的にも歴史的にも貴重な資料となっている。この歴史的開扉の時に武四郎も石室内に入り、好古家の目線で三骨一廟を実見したのである。武四郎の観察では、石棺は石ではなく石灰づくりのたたき土の類であり、木片が棺だとし、銅釘を拾っている。大澤の実検記では、「破砕シタル如キ板ノ腐朽セルアリ掻キ集ムルニ凡二斗許アリ」として、これを布張りの黒漆の箱としている。近年の研究では、聖徳太子墓の三棺は來紵棺であったと推定されており（猪熊 2014）、武四郎がいう「たたき土の類」が「皆ばらばらに成たるを棺台に積重ねた」ものが棺であるのは間違いないが、それが來紵棺であったかはよくわからない。武四郎がその他にみつけた「少々木片」が木棺とすると、聖徳太子墓には來紵棺のほかに木棺（漆塗か）も存在していたことになる。武四郎の実見録では聖徳太子墓内の三棺がそれぞれどのような構造であったかを断ずることはできないが、近年の考古学成果を参考にすれば、大澤の実検記にある「布張黒漆ノ箱」が棺として最も妥当な表現であるといえよう。

さらに武四郎は石室内にある 140 文字の大慈大悲本誓願と梵字の一字一石経を実見した。彼の鑑識眼では前者を聖徳太子によるもの、後者を空海とした。とくに一字一石経は古めかしく、楷書も凡筆ではなく空海の書で間違いないとする。この鑑識眼を否定するわけではないが、後世に付与された伝説が色濃く反映された鑑識眼といえる。ひとつ言えることは聖徳太子墓に入ったという高揚感がこのような鑑識結果を導き出しているということである。ただ、遺物を表採し、拓本を採るなど好古家として資料蒐集を怠たらないところが彼たるべきところである。

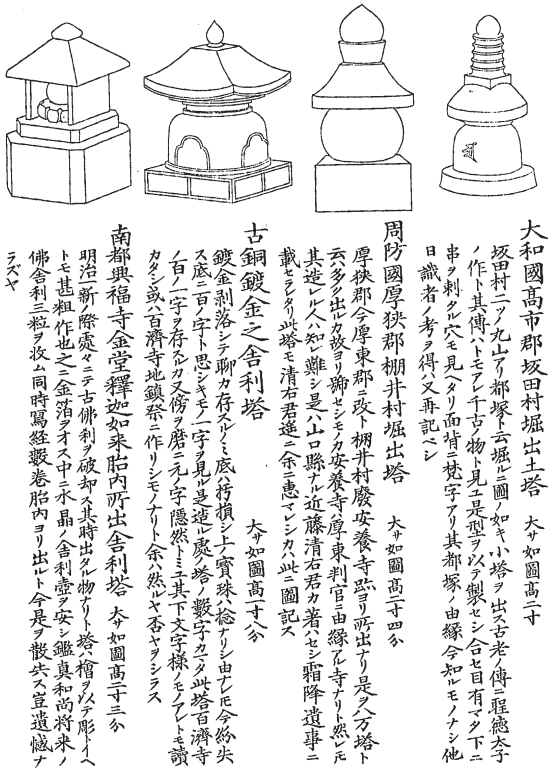
第４章　松浦武四郎が蒐集した飛鳥地域の遺物

武四郎が現明日香村を訪れたのは明治 12 年の一度きりである。明日香村内の道中、武四郎は小塔を一つ入手した。この旅行中に武四郎は大阪で古物会を開催し、これに伴い、出展物一覧である『尚古杜多』を二冊刊行した。この内の第二冊には、明日香村に関する資料として「小塔　一箇和州高市郡野口陵所出　富岡百錬所恵」と「土馬一軀和州高市郡平田村掘出　坂府岡本大講義所恵」が掲載されている。これは、出展目録としての表記のみで、個別の図もなく出展物の詳細には触れられていない。ただ、土馬については、後に武四郎が著した『撥雲余興二集』（明治 15（1882）年刊）において、同一とみられる土馬が紹介されている。これによれば、この土馬は、「和州高市郡檜前村堀出土質赤土ニテ堅剛ナリ」と記され、その横に実物大の図が描かれている。この土馬の図をみると、脚部と頭部が欠損するものの体部には鞍や手綱の表現がみえることから、７～８世紀所産の土馬とみてよい。気になるのは、『尚古杜多第二冊』では出土地が平田村であるのに対し、３年後の『撥雲余興二集』では檜前村と異なっている。こうした出土地の異同が小塔でも表れている。

小塔は、『己卯記行』の文中では、文武陵である高松山の石墓で入手したとある。ところが、『尚古杜多第二冊』では野口陵所出とし、富岡百錬から寄贈されたものと記されている。この出土地の異同表記には、この時期における陵墓治定の複雑な変遷が背景にある。詳しく述べると、明治 12 年当時、野口王墓古墳が文武陵（檜隈安古岡上陵）、五条野丸山古墳が天武持統合葬陵（檜隈大内陵）として治定されていた。この治定は明治４（1871）年 10 月に改定・通知されたもので、明治 14（1881）年２月までは治定の変更はされていない。明治 12 年の『己卯記行』では、武四郎は文武陵のことを「高松山の石墓」と表記するが、字「高松山」にある高松塚古墳と「中尾の石墓」である中尾山古墳を混同している。武四郎は、この旅の行程として、文武陵の前に、鬼の雪隠→鬼の俎板→倭彦命の岩屋→亀石→文武陵（高松山の石墓）の順で見てまわっている。この動線から考えると、倭彦命の岩屋は野口王墓古墳、文武陵は中尾山古墳か高松塚古墳を指していることになる。繰り返しになるが、明治 12 年当時、野口王墓古墳が文武陵として治定されていたことからすると、武四郎は飛鳥の陵墓と古墳を当時正しく認識できていなかったことになる。しかし、逆に言えば、幕末から明治維新後にかけて、文武陵と天武持統合葬陵は目まぐるしく治定替えがなされ、それが同時代の陵墓研究者以外に正しく認識されていなかったことを示している。武四郎もまた、飛鳥における複雑な治定替えの経緯までは理解していなかったと考えられる。こうした武四郎の錯誤は、好古家として古書を嗜み、博識であったことがかえって自身に混乱を招いたのかもしれない。それは、飛鳥の陵墓について、明治４年以前に記された多くの書物が、高松塚古墳が文武陵、野口王墓古墳が天武持統合葬陵と推定していたため、武四郎も錯誤してしまったのではないかと推測される。寛政３（1791）年に記された秋里蘺島の『大和名所図会』には「文武天皇陵　平田村の西にあり。俗に中尾の石墓といふ。〔陵図考〕ニ曰く、字は高松山、高さ二間二尺、廻二十間。」とあり、嘉永元（1848）年に記された暁鐘成の『西国三十三所名所図会』には「文武天皇陵　平田村の西にあり。俗に中尾の石墓といふ。字高松山と云ふ。平田村より陵まで五丁ばかり、山頂き平にしておよそ二間半四方ばかりあり。（後略）。」とある。２冊ともに中尾山古墳（中尾の石墓）と高松塚古墳（高松山の美賛佐伊）を混同している。おそらく、この２冊にみえる混同がそのまま武四郎の錯誤となって表記されたのではなかろうか。そして、武四郎が飛鳥の旅のお供として『大和名所図会』と『西国三十三所名所図会』を参考にしていたことが推定される。先述したように、『己卯記行』における飛鳥

の山王石が藤貞幹の『好古日録』の書き写しであることからも、武四郎は旅先に関する書物に目を通して下調べしていることがわかる。

武四郎は明治 12 年の飛鳥の旅で小塔を入手したが、これとは別に、明治 10（1877）年にも飛鳥地域出土の小塔を入手し、『撥雲余興』に掲載している。『撥雲余興』には、「大和國高市郡坂田村堀出土塔　大サ如圖高二寸　坂田村二ツノ丸山アリ都塚ト云堀ルニ圖ノ如キ小塔ヲ出ス



第３図　松浦武四郎が蒐集した飛鳥地域出土遺物（縮尺不同）
左図：『撥雲余興』より小塔（右上）　右図：『撥雲余興二集』より土馬（左上）

表１　松浦武四郎が蒐集した飛鳥地域出土遺物

	掲載本（刊行年）			
名称	『撥雲余興』（明治 10 年）	『己卯記行』（明治 12 年）	『尚古杜多第二冊』（明治 12 年）	『撥雲余興二集』（明治 15 年）
土塔	大和國高市郡坂田村堀出			
小塔		文武陵、高松山の石墓	和州高市郡野口陵所出　富岡百錬所恵	
土馬			和州高市郡平田村堀出　坂府岡本大講義所恵	和州高市郡檜前村堀出

古老ノ傳ニ聖徳太子ノ作ト其傳ハトモアレ千古ノ物ト見ユ是型ヲ以テ製セシ合セ目有マタ下ニ串を刺タル穴モ見ヘタリ面背ニ梵字アリ其都塚ノ由縁今知ルモノナシ他日識者ノ考ヲ得ハ又再記ベシ」と図入りで記されている［註１］。この小塔は都塚古墳出土とされ、考古資料としての泥塔に他ならない。このように、『己卯記行』と『撥雲余興』により、武四郎が蒐集した飛鳥地域の考古資料は、小塔２基、土馬１箇ということになる。ところが、明日香村内では土馬の出土例は多く認められるもののが、泥塔が出土した事例がない。近隣の事例では、高取町束明神古墳の発掘調査において泥塔が１点出土しているのみである（河上 1999）。束明神古墳の泥塔は、この古墳が幕末頃まで岡宮天皇陵と認識され、古墳の周りに玉垣が巡らされていたことに由来するのだろう。近年、明日香村内でおこなわれた都塚古墳や高松塚古墳、中尾山古墳での発掘調査では泥塔が出土したという報告は見当たらない。都塚古墳は、江戸時代には用明天皇陵であったという伝承があり、江戸時代当時は墳丘に石材が見える程度で、石室は開口していなかったらしい。明治 20 ～ 40 年代になると、都塚古墳は石室が開口され（明日香村 2016）、大正時代には墳丘の周囲に杉の生垣が巡らされるなど、陵墓に治定されはしなかったものの地元住民の手によって大切に守られてきた。こうしてみると、明日香村及び周辺地域に陵墓としての伝承が残る古墳には、泥塔などの仏教関連遺物が祀られていた可能性が高いといえる。よって、武四郎が蒐集した飛鳥地域出土遺物は、飛鳥地域における陵墓の管理と祭祀を考える上で重要な資料と意義付けることができる。

第５章　まとめにかえて

明治 12 年頃の明日香村は、廃仏毀釈により寺勢は衰え、多武峰妙楽寺の建物が岡寺に移築されるなど仏教文化の転換点を迎えていた。一方、山陵や古墳は、幕末期の治定替えによる修補が落ち着きを取り戻しつつも、明治 10 年頃には鬼の俎板の東側で発見された石室石材（現：橿原考古学研究所附属博物館）が分割され自宅に持ち帰られるという事態が起きている（西光 2002）。このような時代背景の中、武四郎が明日香村の古器旧物で関心を示したのは、猿石と山陵だった。武四郎の猿石は、藤貞幹の『好古日録』を書き写したものであるが、猿石が柵に囲まれていた当時の様子をよく伝えている。また、山陵については、文武陵と天武持統陵の比定地をめぐる長い論争によって生じた錯誤をみることができた。そして、武四郎のコレクションにみる陵墓出土の小塔は、飛鳥地域の陵墓祭祀を考える上で重要な資料であると意義づけることができた。

『己卯記行』は、好古家松浦武四郎の人物像を知る上で貴重な稿本である。明治 12 年の旅で蒐集した古物や好古家仲間との交友とそのネットワークを研究された内川隆志氏は、自分が蒐集した社寺の古物を没後には元に返すと述べている武四郎について、「篤い信仰心がもたらす文化財保護者としての自覚が強かった」と評している（内川 2021）。少年期からの蒐集癖や青・壮年期のアイヌ文化の記録と広報活動にみられるように、武四郎は人・モノ・文化を守るという熱い信念を行動でもって実践し、晩年期は好古家として思う存分に生きた人物であった。

武四郎は、明治８年には『考古説略』を著した H.V. シーボルト、明治 15 年には大森貝塚を発掘したエドワード・モース、明治 20 年には造幣局技師であり古墳研究家のウィリアム・ゴーランドなど西洋の近代考古学に精通した外国人とも知遇を得ており、外国人考古学者にも一目置かれる存在であった。武四郎は、考古学が根付いていない時代に日本各地にある遺跡や古墳

の出土遺物を現地で実見し、記録するという考古学の基本を自ずと修得した。武四郎にとって天賦の才を仕事や趣味において普通に実践しただけであり、その成果が現在の様々な学問分野の学史に名を連ねている。近年、彼の偉業が博物館学、考古学、人文科学、民俗学など日本の学問分野で再評価されはじめている。

【註】

註１：都塚古墳出土小塔について、明治 10 年７月に武四郎と古経堂の養鷸徹定との間で書簡のやりとりをしている（松浦武四郎記念館編 2018）。書簡には「北海松浦翁蔵小古塔四個　一曰　大和高市郡坂田村都塚所掘獲　伝云聖徳皇太子所造塼色浅頼（後略）」とあり、このころにはすでに武四郎の所蔵となっている。都塚古墳は用明天皇陵ではないかと同郷の偉人本居宣長も推定しており、武四郎はこの小塔を用明天皇の子の聖徳太子が作って供養したものと価値付けしたかったのだろうか。

註２：これら３点の蒐集資料の内、野口陵出土小塔については、静嘉堂文庫所蔵の「大雄小窟」と墨書された箱に収められている（内川 2014）。その他２点の所在については、筆者の力不足により未確認である。その上、３点とも資料の実見に到っていない。今後、資料の所在確認を急務として、さらに実見の機会が得られるならば近代飛鳥の地域史研究の一助にしたい。

【参考・引用文献】

明日香村教育委員会 2016『都塚古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 12

猪熊兼勝 2014「聖徳太子の墓」『季刊明日香風』第 131 号，公益財団法人古都飛鳥保存財団

今尾文昭 2015「幕末維新期における飛鳥猿石の所在空間」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』河上邦彦先生古稀記念会

内川隆志 2014「近代博物館における人文資料形成史の一視点　静嘉堂所蔵松浦武四郎旧蔵資料の分析から」『博物館学雑誌』第 40 巻　第１号

内川隆志 2021「松浦武四郎明治十二年の旅－好古家とのネットワークをめぐって－」『國學院雑誌』第 122 巻　第 12 号

梅原末治 1940「聖徳太子磯長の御廟」『日本考古学論攷』弘文堂書房

河上邦彦編 1999『束明神古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第２冊，奈良県立橿原考古学研究所

公益財団法人静嘉堂 2013『静嘉堂蔵松浦武四郎コレクション』

國學院大學日本文化研究所編 2008『近世の好古家たち―光圀・君平・貞幹・種信―』雄山閣

西光慎治 2002「飛鳥地域の地域史研究（３）今城谷の合葬墓」『明日香村文化財調査研究紀要』第２号　明日香村教育委員会

斎藤忠 1990「松浦武四郎の考古学観」『日本考古学史の展開』日本考古学研究３所収，学生社

佐藤貞夫編 2015『己卯記行』松浦武四郎記念館

辰巳俊輔 2021「幕末・維新期における檜隈安古岡上陵の実態」『明日香村文化財調査研究紀要』第 20 号　明日香村教育委員会

松浦武四郎記念館 2017『松浦武四郎記念館図録』

松浦武四郎記念館編 2018『近代初期の松浦武四郎』北海道出版企画センター

森浩一編 1988『考古学の先覚者たち』中公文庫

【挿図出典】

第１図：筆者作成

第２図：上　佐藤編 2015 より

下　藤原貞幹 著『好古日録』[1], 鷦鷯惣四郎 [ほか], 寛政 9(1797). 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2583430 より

第３図：左　松浦武四郎 (弘) 著『撥雲余興』１集 , 松浦弘 , 明 10,15. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/771476 より

右　松浦武四郎 (弘) 著『撥雲余興』第２章 , 松浦弘 , 明 15.8. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/902683 より